

たとえリセットされても

不完全ロボット「にんげん」

5年 H・Nさん

ロボットやAIといった言葉を聞かない日はない。私の父や母が子どもの頃にはまんがにしかなかった世界が現実になりつつある。

AIは人間の脳を作り出す挑戦だという。まさに「人工」「知能」だ。この物語の「愛」は感情がないロボットとして描かれているが、感情が脳で生まれているのであれば、AIもいつかは「感情」を手に入れるかもしれない。そうしたAIをのせたロボットが誕生したら、もはや人間とAIロボットの違いは何もないのだろうか。そうした世界で人間にしかないものは何なのだろうか。

私は「不完全さ」だと思う。この物語の登場人物は、みな不完全である。不完全さがあるから、まちがいをし、時にはけんかをし、そして成長する。出木杉君は主人公にならない。欠点だらけ、失敗だらけのび太だから人は心を動かされる。リセットできない人生だからこそ、その一瞬一瞬に、切なさや喜びがある。

「不完全さ」は、人それぞれだ。きれいな球体など存在し得ず、でこぼこや傷だらけで、同じ形は存在しない。人はその「不完全さ」を「個性」と呼ぶのだろう。自分と他人は違うからこそ、相手を知りたいと思うし、自分を知ってほしいと思う。たとえば夫婦や親子であっても、自分と違う人間の考えていること、思っていることは完璧には分らない。「相手を知る」ということも不完全にしかできず、だからこそ相手のことを知るということは永遠に続くのだろう。

ラストシーンで、リセットされても、自分が忘れなければ「愛」は自分の中にいる、というセリフがある。最後は自分の気持ち次第ということだ。お互いの不完全さを知った上で、相手をとことん知ろうとすれば、そこに愛が生まれる。この物語の主人公ロボットの名前が「愛」である理由が分かった気がした。

ロボットやAIは、こうした人生の真実を改めて人類に問いかけている点こそが、「最高の発明」なのかもしれない。